

中南米地域の邦字新聞を活用した日本人移住に関する諸研究 「フジヤマのトビウオ」とブラジル日系コロニアの戦後

乗松優

国会で十分な審議を尽くしたと言えぬまま、外国人労働者の受け入れを拡大する改正入管法が二〇一九（平成三一）年四月一日から施行された。少子高齢化に伴う人手不足が深刻であることは誰もが認めるところであるが、外国人就労による問題解決は、今や世界中で危機に瀕している多文化共生の現実と向き合わねばならないことを意味する。特に、配偶者や子どもの帯同が可能で事実上の永住を認める「特定技能2号」は、本法が紛れもない移民政策の一環であることを示している。にもかかわらず、私たちは将来に亘って必要となる社会統合のコストを正しく理解せず、新たな外国人労働者を景気の調整弁程度にしか考えていない。

それほど遠くない過去において、日本は多くの国民を労働者として海外へ送り出した。アジアのみならず、北アメリカやラテンアメリカ、太平洋の島々にまで日本移民が溢れた二〇世紀は、我が国にとって海外移住の時代であったと言ってもよい。しかし今日、試行錯誤しながら移民・難民問題に取り組むドイツを他人事のように眺める私たちは、かつて日本人自身が祖国を後にした事実から目を背けているのではないか。新天地へ活路を求めた日本移民がしばしば私たちの認識の外にあるのは、敗戦によって植民地や占領地を失った後、日本社会が帝国の版図を拡げた過去を忘却しようとしたことと地続きだろう。

戦後の世界的スイマーであった「フジヤマのトビウオ」のブラジル招聘は、無意識のうちに移民問題に距離を取ろうとする私たちの態度に一石を投じる。一見すると、移民と無関係に思えるスポーツの日本代表は、海外に根を下ろした日本人から熱烈な支持を受け、我が国が国際社会に復帰する前からアメリカや南米諸国を駆け巡った。十分な社会保障や生活支援を受けられぬまま、厳しい労働と差別を耐えたブラジル移民は、国外で奮闘する選手のように自らを重ね合わせることで、戦後の混乱が生んだコミュニティの分断に終止符を打ち、自己の尊厳を回復しようとした。海外移住者が懸命に生きた軌跡は、他でもない日本人が移民問題に取り組むための歴史的経験を有していることを私たちに思い起こさせるものである。

はじめに

やがて機上にさっと現れた一行五人の勇姿。日頃写真でばかり見ていた憧れのその人々。しかも、左の胸に輝く日の丸。よく来たな、と進む人群のうちに、さつとな

ひく日伯両国旗。あゝ日の丸の旗が打ち振られたのだ。白地に赤く日の丸がへん翻
とコンゴニヤスの空に樹てられたのだ。『伯刺西爾時報』一九五〇年三月六日記
事より」

「勝ち負け抗争」の混乱が続く一九五〇（昭和二五）年三月四日、サンパウロ市のコ
ンゴニヤス空港に日本からのスポーツ使節が降り立った。遊佐正憲監督に率いられた村
山修一、古橋廣之進、橋爪四郎、浜口喜博である。選手等は、日本の水泳界が国際水泳
連盟（FINA）に復帰したばかりの一九四九（昭和二四）年八月に、ロサンゼルスで
行われた全米水上選手権に出席した。一五〇〇メートル自由形で世界記録を打ち立てた
古橋・橋爪の活躍ぶりは、遠く離れた南米の地にも響き渡っていた。

世界に誇る「フジヤマのトビウオ」（以下、「トビウオ」）を一目見ようと、およそ五
〇〇〇人の邦人が押し寄せ、空港内は大混乱に陥った。「トビウオ」来聖からわずか一
九日後に行われた全伯水上競技大会では、一〇年ぶりに日の丸が掲揚台に掲げられ、君
が代が唱われた「ブラジル日本移民史料館他編二〇〇八：一一七」。

日本選手団は、アデマール・バールロス聖州統領（現在の州知事）夫妻も観戦した全伯
水上競技会のみならず、リンス、アラサツバ、サントス、リオデジャネイロ、プ・プ
ルデンテ、ロンドリーナ、リオ・プレットなどを精力的に訪れた「森二〇一三：二二
五」。一行が参加した各地大会の入場料売上高を合わせると、二一八万八二九〇クルゼ
イロ（今日の日本円でおよそ二億一〇〇〇万円。ただし、最後の聖州選手権大会の売り
上げを除く）にも上り、南米のアマチュア・スポーツ始まって以来の金融的大成功を生
んだと言われる（図1）。若き日本代表の一挙手一投足は連日、新聞紙面を賑わし、
ブラジル社会で「敵国民」扱いだった日本移民を勇気づけた。

本稿では、「トビウオ」来伯を取り上げ、彼らが「日系コロンビア」（日系コミュニティ）
に与えた影響を考える。わずか四〇日余りの滞在は、半世紀以上経った今も、鮮烈な経
験として日系人の記憶に留められている。なぜ、日本代表は戦後のブラジル社会から必
要とされたのだろうか。また、日系コロンビアは、代表の活躍からどのような日本人像を
作り上げようとしたのか。今日の近代史からはその姿が見えづらい越境者をスポーツと
の出会いを通して描く。

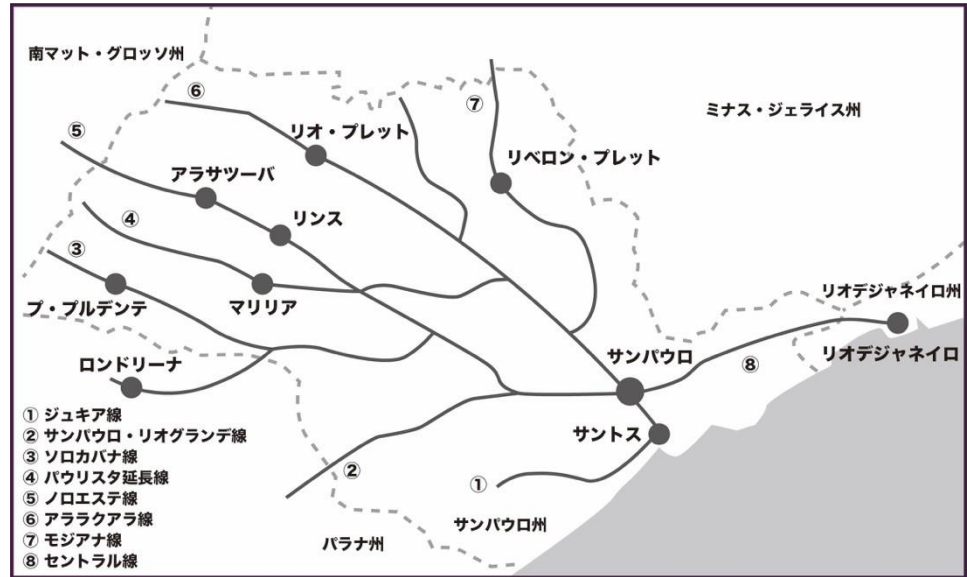


図1 「トビウオ」が訪れた主な都市。いかに、日本代表が短期間で精力的な巡業をこなしたかわかるだろう。

ヴァルガス独裁体制と「勝ち負け抗争」

日伯関係の本格的な幕開けは、七八一名の日本移民を乗せた笠戸丸が神戸港を出発した一九〇八（明治四一）年に遡る。日露戦争後の不況下、海外に職を求めた人々は「錦衣帰国」を夢見てサンパウロ州のコーヒー園で「コロノ」（契約労働者）として働いた。一九二〇年代半ばになると、国策として移民が送り出されるようになり、一九二八（昭和三）年から一九三四（昭和九）年にかけてピークを迎える。言葉や習慣の違い、慣れない食事、暑い気候、監視付きの労働に耐えた日本移民は、賃金制のコロノから独立農へ転じるなどして様々な作物を生産。戦前には、約一九万人もの日本人が新天地を求めて海を渡ったと言われている「ブラジル日本移民史料館他編二〇〇八…一二」。

「トビウオ」が来聖した一九五〇（昭和二五）年は、移民が苦勞の上に立てた暮らしに陰りが差し、日系社会が長く停滞していた。そのきつかけとなったのが、ジェットウリオ・ヴァルガス大統領による「新国家主義」（民族中心主義）の政策であった。一九三〇（昭和五）年に革命によって政権を掌握したヴァルガスは、国家統一の立場からナシ

ヨナリズムに根ざした政策を推進。当時、コロニアの中で生活を営んでいた日本人は、ブラジル社会から同化不能な民族と見なされ、差別と迫害にさらされた。「黄禍論」の流行も災いし、一九三四（昭和九）年には日本移民の実質的な入国を制限する「外国移民二分制限法」が施行される。さらに、日米開戦後の一九四二（昭和一七）年一月末には、日伯間の国交が断絶され、日本人は不動産の売買や担保行為の禁止、日本語の使用禁止、日本人同士の集会の禁止などの制限を受けた「伊藤・住田・富野二〇一五」。

ヴァルガス下野後も長らく続いた日本移民の排斥は、戦後直後の「勝ち負け抗争」を引き起こす要因となる。同胞同士で凄惨な殺し合いを演じたこの抗争は、第二次世界大戦後に日本の敗戦を信じない「勝ち組」（戦勝派・信念派）と、敗戦の事実を受け入れた「負け組」（敗戦派・認識派）との間に起こった。特に、肅清のターゲットになったのは、戦前の日本文教普及会やリーダー層であった。彼らは、日本語新聞の強制停刊と外交官の帰朝後、日本語や日本精神の重要性を説いて回った人々であった「深沢二〇一七」。

しかし、その指導者が、日本の敗戦を伝える「終戦事情伝達趣意書」に署名をすると、多くの日本移民が彼等の行為を「裏切り」と感じて強く反発した。直接の戦場にならなかったブラジルで、ポルトガル語を理解できないまま、情報の断絶と差別に耐えていた日本人にとって、戦勝が自らのアイデンティティを保証する拠り所だったためである。日伯間のナショナリズムに翻弄された日系社会は、十数人の死者、数十人の負傷者、数千人の検挙者を出す抗争に突入し、終結までに一〇年近い歳月を要した「外山二〇一二」。

日系コロニアにおけるスポーツの拡がり

同胞同士で実力闘争が行われた混乱期に、日本から水泳選手を呼び寄せること自体、緊張した社会情勢とそぐわない。「トビウオ」招請が日系コロニアに与えた影響を考える前に、スポーツがブラジルの日本移民にとって、どれほど馴染み深いものだったかを整理しておこう。

多くの日本移民にとって初めてのスポーツ体験は「船上運動会」だろう。四〇日から六〇日もかかる移民船の航海中、日本移民は赤道祭や芝居、シネマなどと共に船上運動会を楽しんだ「JICA横浜海外移住資料館二〇一六・二二」。かつて政府補助単独移

民であった作家の石川達三は、『蒼氓』（第一回芥川賞受賞作）の中で運動会を長旅の慰みとする移民の姿を描いている「石川二〇一四」。この船上運動会は定番行事のひとつとなり、戦後も移民船が廃止されるまで長く続けられた。一九六一（昭和三六）年に出港した「第二三次ぶらじる丸」の乗員による船内新聞『青海原』には、移民船の甲板上で一・二・三等船客と船員が運動会に参加した記録が残っている「第二三次ぶらじる丸一九六一」。

ただ、これらはいくまで長期間に亘る船旅のストレスを解消するガス抜きに過ぎなかった。サンパウロ州政府から運賃を補助されたコロノにとって、大農場主のコーヒー園で義務農年の務めを果たす傍ら、スポーツを楽しむ余裕があったわけではない「ブラジル日本移民百周年記念協会他編二〇一三：一九五」。

それでは、移民社会にスポーツが持ち込まれたきっかけは何だったのだろうか。一九三三（昭和八）年に移民二五周年を記念して刊行された『伯刺西爾年鑑』を紐解くと、「邦人運動競技会」と題した記述が目に入る。

特に注目すべきは各地方にある日本人小学校がその児童の競技を行うに際して逸早く近代的理論に樹つ競技法及び組織を採用し、伯国小学児童界に未曾有の前例を示して伯人有識者を驚倒せしめつゝある事であつて、実に愉快を禁じ得ない。「伯

刺西爾時報社編 一九三三：二三七」

渡伯を定住ではなく一時的な出稼ぎと考えていた家族移民にとって、子弟の教育は頭を悩ませる問題であった。数年間かけて貯蓄を達成し帰国を果たした後、子ども達が日本社会に適応するためには、母国でも通用する教育が求められた。他方で、日本政府も帝国を維持するために、南米へ植民した日本移民の皇民化教育に力を注ぐ必要があった。日系コロンビアにおけるスポーツは、移民と日本政府の思惑が交錯する初等教育の現場で産声を上げたのである。

その後、外国語を制限する同化政策によって日本語学校は閉校の憂き目を見る。ところが、これが逆説的にスポーツや武道を普及させる要因となった。

根川「二〇一六：二七七―二九四」は、移民の団塊世代にあたる人々の習慣や経験が、

日系コロニアにおけるスポーツ環境をいち早く作り上げたことを指摘する。日本人による入植がピークを迎えた一九二〇年代後半から一九三〇年代は、日本においてエリート
の嗜みに過ぎなかったスポーツが大衆化した。この時期に、スポーツの熱狂的雰囲気
味わった人々が渡伯することで、各入植地では汎日系社会規模の大会が開催されるよう
になった。ブラジル人優先の民族主義が台頭する一九三〇年代半ばから日本語教育が禁
止される一九三八（昭和一三）年には既に、日系コロニアで少年スポーツの組織化がな
され、野球や陸上競技が盛んになっていく。スポーツは、日本語学校に代わる新たな「徳
育」の拠点として、日本移民の間で拡がっていった。

その一方で、この日本語学校の閉鎖が、武道の普及にも一役買った。小林「二〇一六」
二五七―七五」は、一九三八（昭和一三）年に日本語教育がブラジルの農村部で禁止さ
れたことを皮切りに、柔道や剣道などに対する関心が高まった点に注目する。武道は日
系子弟にとって、身体能力の向上と健康の増進、質実剛健の精神の養成、礼儀作法の心
得、日本人気質の育成に役立つと考えられていた。彼によれば、武道教育は体育のみな
らず、精神の涵養やブラジル生まれの子弟を日本と結びつける役割があった。

このように、日本移民とスポーツ・武道との関わりは、彼らがある程度の経済的基盤
を得た一九三〇年代から始まった。当時、日本で大衆スポーツの洗礼を受けた人々が中
心となり、ブラジル各地の日本語学校を拠点にその普及に努めた。興味深いことに、ス
ポーツや武道は、必ずしも競技力の向上に主眼が置かれていたわけではなく、日本人と
しての道徳や精神性を育成する場として捉えられていた。特に、日本語学校が禁止され
てから組織立って自国の文化を伝える機会に限られていた。そのため、日系コロニアの
スポーツ活動に対する期待はいやが上にも高まったのである。本稿では、こうした身
体教育による人間形成の議論からさらに歩を進め、日本移民自身が水泳という一競技を
通して、どのように戦後の混乱を乗り越えようとしたのかについて検証する。

日系コロニアにとっての「トビウオ」

オリンピック・パラリンピックを挙げるまでもなく、水泳は様々なスポーツの中でも
競技人口が多い花形種目である。ただし、戦後直後の日系コロニアに限って言えば、そ
の前提は必ずしも妥当ではない。ブラジル海軍の斎藤巍洋と、YMCAやエスペリア・
クラブの佐藤貫一が戦前期にコーチとして活躍したという例はあるものの、日系社会で
組織的に水泳が行われるようになるのは、パウリスタ延長線の街マリリアでヤーラ・ク
ラブが設立される戦後を待たねばならない「森二〇一三：二二五六」。日本移民にと
って水泳は、ある時期までそれほど馴染みのあるスポーツではなかった。それでもなお

「トビウオ」に白羽の矢を立てたのはいかなる目的があったのだろうか。

日系コロニアにとって、日本代表の招請は「勝ち負け対立などのコロニアの暗いムードを払拭しようとコロニアの有志たちがバジューリア^{バジューリア}体育局長の協力を得て招聘した」ものであった[森二〇一三・二二五]。一九五〇(昭和二五)年二月一日の『伯刺西爾時報』に投稿された「日本水泳選手団来伯に際し」によれば、ブラジルに柔道を普及した先駆者・大河内辰夫が代表となつて、歓迎委員会を組織したことが記されている⁴。この他にも、田村幸重(サンパウロ市議)や河合武夫(コチア産業組合)、石原桂造(トキワ旅館創業者)、高橋勝(会計士、後にブラジルトヨタ重役)、柳澤秋雄(外務省・派遣教員留学生)、鈴木威(日系人画家)、原源造(後の陸上指導者)、藤倉二郎(デニス杯出場テニスプレイヤー)、深谷清節(柔道家)、赤尾龍三(柔道家)など、各界の名士が委員に名を連ねた。

なかでも、日系人として初めてサンパウロ州議(一九五〇年)や連邦下院議員(一九五四年)になつた田村市議が、歓迎委員会副委員長として尽力したことは特筆に値する⁵。日本代表が離聖の折に、サンパウロ市議会在「トビウオ一行の日伯親善と伯国水上界に対する貢献を感謝した」歓迎決議文を発表するなど、田村はスポーツを通して日本移民の名誉回復に力を発揮した⁶。つい数年前まで日本人による集会が禁じられていたことを考えれば、歓迎委員会を組織した上に市議会の声明まで獲得できたことは、日系コロニアの存在感を示す重要な布石になつたに違いない。当時の政界や財界、教育界、芸術・スポーツ界で活躍する人々が「オールキャスト」で臨んだ背景には、それだけブラジル社会からの排斥と日本人同士の対立が、日系コロニアに暗い影を落としていたことを物語る。

事実、招請の数年前から行われていた「戦災同胞救援運動」は、コロニア内部の対立を解消できないでいた。母国戦災者へ救援物資を送るための募金活動は、一九四七(昭和二二)年四月から一九五〇(昭和二五)年七月までの間に七一万七三九クルゼイロを集めるなど、大きな成果を果たしたが、その活動は決して順調ではなかった。救援運動に参加すること自体、暗に日本の敗戦を認めることになり、約五万世帯いたとされる在伯同胞のうち、一割にあたる五〇〇〇世帯しか参加しなかつたのである[平田 一九八一・七二四一六]。運動はコロニアの連絡機関としての役割を期待されていたが、逆に同胞社会の対立を際立たせる結果となつた。大河内が、「勝ち組」最右翼のメディアであった『伯刺西爾時報』に趣意書を掲載してまで、日本移民の大半を占めた勝ち組大衆に協力を呼びかけた背景には、国際競技大会を通して日系コロニアを和解させるという意志があつた。

ところで、いかに「トビウオ」が世界的なチームとはいえ、なぜ一競技に過ぎない水泳にこれほどまで過度な期待が寄せられたのか。それは、彼らが昭和天皇から直々に薫陶を受けていたことによる。一九四九（昭和二四）年七月二二日に行われた戦後初の日本選手権水上競技大会では、昭和天皇自ら、香淳皇后や高松宮宣仁親王、喜久子親王妃と共に神宮プールに赴いた（写真1）。一五〇〇メートル自由形で古橋が世界タイ記録を出したレース後、日本水泳連盟会長・田畑政治に伴われた天皇は、身体をぬぐう暇もなく水着姿で並んだ古橋廣之進や橋爪四郎、浜口喜博、村山修一、真木昌、丸山茂幸、田中純夫らに「ご苦労さん、水上日本と先輩のために今後も最善を尽くしてがんばって下さい」と声を掛けた⁷。

それから一カ月半後、全米選手権で一もの世界記録を手土産に凱旋帰国した水上選手団一行は、再び天皇・皇后に拝謁を許される。一九四九（昭和二四）年九月五日に内廷北玄関口にて、天皇は「新聞、ラジオ、映画であなた方が非常に努力され、日米親善につくしてくれたことを知って喜んでいきます。どうかこれからも水泳のためにますます努力されるよう望みます」と一行にねぎらいの言葉をかけ、恩賜のタバコを与えた⁸。

戦前にブラジルへ渡った日本人にとって、裕仁は神聖不可侵な存在であり続けた。「トビウオ」が来伯した一九五〇（昭和二五）年、『伯刺西爾時報』も『日伯毎日新聞』も四月二九日を天長節として盛大に祝っている。周知の通り、GHQの占領政策によって、戦前の祝祭日は一九四八（昭和二三）年に廃止された。同年七月二〇日に公布された「国民の祝日に関する法律」（法律第一七八号）は、天長節に代わって天皇誕生日を制定した「紀元節奉祝会編 一九六八」。

ルオフによれば、戦後日本の保守政府は、内奏の維持や叙勲制度の復活、建国記念の日の再確立などによって、新憲法下においても天皇の地位を維持しようとした。象徴天皇制は、新憲法が定める民主主義を侵犯しない限りにおいて、未だにナショナルリズムの中心であり続けている。とりわけ、敗戦後の惨めな状況において、皇室は日本人が持つことのできる数少ない国民的誇りであった「ルオフ 二〇〇一―二〇〇三」。

戦争とそれに伴う外交官の帰朝によって、長らく「棄民」状態にあったブラジルの日本人にとってもまた、天皇や皇室との繋がりはナショナルな自己意識を保つ手段であった。事実、一九六八（昭和四三）年の移民五〇年祭に三笠宮夫妻が出席した際には、五万人もの日本移民が奉祝のためにイビラプエラの工業会館へ詰めかけた。さらに、一九七八（昭和五三）年六月一八日の日本移民七〇周年記念祭には皇太子夫妻（上皇・上皇后）が臨席し、式典会場となったパカエンブー競技場に八万人の日系人を集めた「サンパウロ人文科学研究所編 一九九六…二一九三〇…ブラジル日本移民史料館他編 二〇〇八…一三二二」。



写真 1 1949 (昭和 24) 年の日本選手権水上競技大会で、「フジヤマのトビウオ」を激励する昭和天皇と香淳皇后。天皇の右隣には、東京オリンピック招致の立役者、日本水泳連盟会長田畑政治の姿がある＝メリーランド大学図書館ゴードン W . プランゲ文庫所蔵

日系コロニアにおいて天皇への信奉が強く見られるのは、ブラジルに送り出された日本移民が、帝国の一員として日本の海外発展に寄与するという使命感を胸に抱いていたためである。我ら日本移民という帰属意識は、綿花など特定生産物の生産地を短期間で開発するのに都合が良く、日本政府にとっても効果的な管理手段となった。政府は自国民が南米に入植した後も、在外公館や日系人会を通して皇民化教育（教育勅語や修身、国語の普及）を施し、彼らの母国に対する愛国心を大いに涵養し続けた。他国の主権を侵害しない形で、海外植民事業における裨益の最大化を目指した日本の拡張的帝国主義は、本邦に負けぬ「日本」を海外に建設してみせるという移民たちの気概に支えられていた「遠藤二〇一六」。かつて国家元首にして統治権の総攬者であった、天皇の期待を一身に背負った日本代表ほど、その「名代」に相応しい人材はいなかったのである。

パジャリア体育局長の支援

ただ、極端な民族主義の下で「トビウオ」招請が実現するためには、ブラジル側の協力者が不可欠であった。その人物こそ、森の記述に登場したシルビオ・デ・マガリヤン

エス・パジャリア体育局長である。ブラジル社会がコロニアの動向に目を光らせていた時代、日本移民に力を貸したパジャリアとはいかなる人物だったのか。招請に関わった人びとの多くが鬼籍に入る中、パジャリアを知る人物を求めてサンパウロを訪れた。

石井賢治は、一九五一（昭和二六）年一二月に開催されたサンシルベストレー大会（ガゼッタ・エスポルチーバ主催）に出場した元陸上日本代表である。本大会で一〇位入賞を果たした翌年一月三日には、パカエンブー競技場において長距離競技会に参加し、二位という好成績を収めた「石井二〇一三・一九八一・二〇六」。ランナーとしての第一線を退いた後、ブラジルに移住した石井は、アテアビスタ会の一員として日伯スポーツ交流を長らく支援してきた。

戦後の間もない頃、「フジヤマのトビウオ」が来ているんですよ。古橋さんに聞いた話では、本当にプールサイドが満員になって。その時、まだ講和条約の前だったから、日本はまだ敵国のような扱い。ブラジルは、日本に宣戦布告していたからね。パジャリアさんが、「私の一存で日の丸を揚げろ」と言ってる。在留邦人は戦前・戦中、日の丸を揚げることでできなかったから、涙を流して日の丸を仰ぎ見たと言っていましたね。「二〇一七年四月二七日、石井賢治氏より筆者聞き取り」

石井の話にも登場するパジャリアとは、サンパウロ州で体育局長を務めたスポーツ界の重鎮である。彼自身、一九三二（昭和七）年のロサンゼルス大会や一九三六（昭和一一）年のベルリン大会に出場したハードル種目のオリンピックであった。また、一九六三（昭和三八）年から一九九〇（平成二）年にはオリンピック委員長を務め、ブラジルのスポーツ界を牽引した人物としても知られている。一九九四（平成六）年、長野冬季オリンピック招致のためにブラジルを訪れた吉村午良^{むらう}長野県知事に協力し、南米票を取りまとめたのは他でもないパジャリアであった「石井二〇一三・一九八一・二〇六」。

そのパジャリアは一九五〇（昭和二五）年に、聖州政府の予算を使って日本水泳選手団を呼び寄せた（写真2）。国交がない日伯間の招請に反対するヴァルガスの意に反して、パジャリアがスポーツ振興策を打ち立てたのは、彼が元大統領の政敵であったアデマール・バローロス州統領の腹心であったことに起因する。サンパウロ州は一九三二（昭和七）年、クーデターによって政権を奪取したヴァルガス臨時政府に蜂起し、多くの死傷者を出しながら敗残した「伊藤・住田・富野二〇一五・一四三・四」。日系コロニア支援の裏側には、地方分権から中央集権へと舵を切る不安定な時代に、資金難によってアスリ



写真 2 コンゴニヤス空港に到着した「トビウオ」一行とそれを迎えるパジリア体育局長（敬礼する男性に挟まれたダブルスーツの人物）。前列左から3人目に村山と、向かって右隣に遊佐＝ブラジル日本移民史料館所蔵

ートとして十分な活躍ができなかったパジリアのスポーツ界に対する思い入れがあったと言われている¹⁰。

実際に、監督として「トビウオ」を率いた遊佐正憲は、このパジリアとも縁ある人物であった。一九四〇（昭和一五）年に、遊佐がブラジル海軍コーチであった斎藤魏洋、葉室鉄夫と共に現役選手としてリオを訪れた際、パジリアは体育局長として日伯交流の任に当たっている。それ以来、実に一〇年ぶりの日本選手団訪問である。パジリアが『伯刺西爾時報』の読者に対して寄せた「在伯同胞各位在伯日本人諸君に訴う」には、サンパウロ州のスポーツ界を統括する責任者としての意気込みが表れている。

特にこの際私が友人として日本人コロニアに訴えることは従前通り強く団結してあなた方の兄弟を迎えられんことであります。私共ブラジル人でさえ遠い日本からの訪問者を迎えるに當り大きな喜びと誇りを感じこの祭典に団結している位ですから在伯日本人はより一層大きな誇りをもって従来が行きがかりを捨て大きな家族として一致して兄弟の渡伯を歓迎して頂きたいのであります。『伯刺西爾時報』

一九五〇年二月一日記事より」

スポーツ興行とは言え、日本選手の入国を歓迎し、日系コロニアの団結を呼びかけるパジリアの言葉は、ブラジル中央政府の意向とは正反対であることに留意すべきである。そもそも、パジリアの理解と協力なくして、各界の名士による「日本水泳選手団歓迎準備委員会」（歓迎委員会の前身）は結成されなかった。ちなみに、日本移民の青年会が組織化した全伯陸上競技大会（第一一回大会）が日伯国交正常化前の一九四九（昭和二四）年に開催されたのも、スポーツに国境はないとする彼自身の信念によるものであった。「石井二〇一三…一九九」。ブラジル社会が日本移民に敵愾心を抱いている時代、パジリアという反骨精神を貫いた指導者の力を借りることで、日系コロニアはスポーツを通して同胞社会の宥和の道を歩み始める。

“水の親善使節”としての日本代表

招請に関わった日伯の指導者にとって、スポーツは日系コロニアの混乱を収束させ、ブラジルへの社会参加を促すきっかけになることを期待されていた。この目的を実現するために、日系コロニアは「トビウオ」の活躍にどのような意味を与えたのだろうか。「泳ぐだけならば魚が一番速い」と述べ、スポーツの公益性を唱えたのは、他ならぬ古橋である¹¹⁾。直接、観戦したか否かにかかわらず、「トビウオ」の来伯は今日にいたるまで、コロニアに大きな影響を与えた出来事として語り継がれている。

ただ、ブラジルに到着したばかりの「トビウオ」は、初めこそ首実検にかけられた。幾人かの移民たちが、日本の切手や紙幣、新聞の切り抜きを見せて、一行にそれが何であるかを問うたのである。

移民を懐疑的にさせた理由は、日本代表が一般的な日本人男性に比べて、あまりにも立派な体躯をしていたためであった。二二歳の古橋は身長一七五センチメートル、体重八〇キログラム。同年齢の橋爪は一八三センチメートル、七二キログラム。主将を務めた最年長二七歳の村山は一七六センチメートル、七六キログラム。二四歳の浜口は一八一センチメートル、八三キログラムもあつた¹²⁾。一九五〇（昭和二五）年当時、二〇歳を迎えた日本人男性の平均身長はただか一六一・五センチメートル、平均体重は五五・二七キログラムに過ぎない。「国立健康・栄養研究所一九五一…二二」。あまりに規格外の選手を前に、「日本人にしては体が大きすぎる。米国に住んでいる東洋人で、米国の回し者ではないか」と彼らの出自を疑った人がいたのも無理からぬ話であつた。「古橋

一九八六…一一二」。

その反面、古色蒼然たる式典が日本代表を戸惑わせた。勝ち組も負け組も歓迎パーティでは「大日本帝国水泳選手団歓迎」との垂れ幕を掲げ、宮城遙拝や戦没兵士への黙とうを行った「古橋 一九八六・一一三」。日本代表が来伯したのは、敗戦から五年も経つてのことである。敗戦後もなお、彼らが保守的な社会を維持したのは、日系コロニアが相互扶助と自律のためのシェルターだったことによる。後年、古橋が明らかにしたように、日本代表は地元社会に無用な刺激を与えぬよう、ブラジルのファンと接する時には慎重な対応を心がけた「古橋 二〇〇四・一一二一六」。

講和条約の締結を前に、日伯スポーツ交流など望むべくもないと諦めていた日系コロニアにとって、「トビウオ」の招請はまさに寝耳に水だったに違いない。それゆえ反響も大きく、『日伯毎日新聞』は「こんどの「トビウオ一行の来伯」は今まで日本外交官が誰一人としてなし遂げ得なかつた外交上の収穫を日本にもたらした。われ／＼は日本及び日本人をあらためて見直さねばならない」との伯字紙の声を紹介した¹³。連日、邦字紙では一行の動静が報じられ、選手の練習ぶりや泳法について細かな情報が伝えられた。

なかでも、ブラジル側ヘッド・コーチとして、日本代表を迎え撃つ立場にあった佐藤貫一は、「日伯対抗の形式で競泳会を催す計画であるが勝負はこの際問題じゃないと思う。最高技術を持つ日本水泳選手の泳法を目の当たりに見たというだけで、技術的には勿論精神的にも大きな収穫を得る」と、忙しい歓迎の合間を縫って猛練習に明け暮れる代表の姿勢を高く評価した¹⁴。ブラジル奥地に住む日本人は仕事を手につかぬまま、一日千秋の思いで彼らの勇姿が見られる日を待ちわびていたという¹⁵。

そして、何より移民達を感激させたのは、バールロス州統領の言葉であった。三月一日付けの『日伯毎日新聞』には、前日にバジリア体育局長に付き添われて州政府を訪ねた一行へ、バールロスが贈った激励のメッセージが紹介されている。

こんど日本選手一行を招聘したことは実に画期的な企てで、州政府としても喜びにたえない。また大事な選手一行の派遣におうじてくれた日本政府にたいしても深く感謝する。今後ともスポーツを通じ日伯間の友好を計りたい。【『日伯毎日新聞』

一九五〇年三月一日記事より】

この言葉通り、バールロスは、三月二三日に行われた全伯水上競技大会の開会式に臨場し、君が代が吹奏される中、自らの手で日の丸を掲揚した。州政府のトップが見せた意外な行動に、バカエンブー・プールに詰めかけた六〇〇〇人の観衆は思わず息を呑んだ。

州統領自ら、公式の場で日の丸や君が代を承認したことは、日本移民にスポーツの場ならばナショナルリズムを発揮することが許されるという認識を与えたのである。以後、リベロン・プレットやリンス、ロンドリーナ、マリリアなど、代表が訪問した先々でも日の丸が掲げられる。

『伯刺西爾時報』は、この晩の出来事を興奮気味に「未だ平和克復前の外交関係なき前に、よくも日章きが公式に挙げられた。これもスポーツの徳だ」と報じている。その一方で、『日伯毎日新聞』は「コロナは完全に『スポーツ使節』のお手伝いをやりとげた」との社説を発表して、明確に日系コロナをスポーツ外交の一当事者として位置付けた。祖国日本の敗戦を巡って、ことあるごとに反目してきた両紙が「トビウオ」を巡る州政府の扱いを肯定的に報じることで、日本代表は外交関係を修復する、水の使節としての役割を確かなものにしてゆく。

「トビウオ」に投影された理想

コロナの期待を受けて、「トビウオ」の実力が遺憾なく発揮されたのは、全伯水上競技大会三日目（三月二十五日）に行われた八〇〇メートルリレーであった。日本代表チームはこのレースにおいて、八分五九秒六という好成績で南米記録を破った。アンカーの古橋がゴールをタッチしたとき、日本代表は二位の聖州チームを四〇メートルも、さらに最下位のチームを一〇〇メートルも引き離していた。

水泳選手にとってオフシーズンの日本から来伯し、わずか三週間の調整で南米記録を更新した日本代表に、邦人社会はすっかり舌を巻いた。街では日本代表のプロマイドが飛ぶ様に売れ、ブラジル人までもが「ペイシエ・ボアドール」(Peixe Voador：トビウオの意)という言葉を口にした。

日本代表が偉業を成し遂げた試合を観戦した画家で評論家の半田知雄は、一九五〇（昭和二五）年三月二七日付けの日記（未刊行）の中で、この時のコロナの興奮状態を次のように記している。半田と言えば、一九七〇年代の初期から移民資料収集の必要性を説き、ブラジル日本移民史料館の構想を作り上げた人物として知られている¹⁶。

在留同胞が水泳選手に熱狂する心の底には、信念派が、日本は戦争で勝った、と云っていたのに似たものが横倒っている。劣等感のカムフラジである。個人的に、或いはコロナ全体としてよりどこを失ったものが、生神様の当来のように思ったのである。【半田 一九五〇】

やや突き放したニュアンスを含むこの文言は、後年に彼が上梓した『移民の生活の歴史』には見当たらない。万年筆でノートに速記された跡から考えて、この日記は観戦か

らあまり時間をおかずに作成されたものと判断できる。半田の記録からは、自らの出自を徹底的に否定された日本移民が、藁にもすがるように日本代表に自らの人生を重ね合わせた様子が窺える。彼の言葉を借りるならば、日本代表は今や「生神様」として、苦悩する日本移民に存在意義を与える超越的な存在となった。

これだけでも、日系コロンビアの期待に応える成果であったが、代表の真価が発揮されるのはここからであった。闘いの舞台を新開地マリリアに移した試合で、「トビウオ」は二つの世界記録をたたき出す。彼等が偉業を成し遂げたマリリアは、国内最大規模の日系コロンビアがあったにもかかわらず、日本に住む私たちにとってあまり馴染みがない。しかし、マリリアほどブラジル日本移民にとって、戦前・戦後の受難を象徴する場所もないだろう（写真3）。

サンパウロの日本語学校、暁星学園の創立者で、ジャーナリストの岸本昂一は、その著書『南米の戦野に孤立して』で、このブラジル奥地の小都市に多くの日本移民が入植した経緯を書き残している「岸本二〇〇二：三八―四四」。もともと、マリリアに住む日本人の多くは、サンパウロ州にある港湾都市、サントスで生活を営む者たちであった。よく知られているように、サントスは「ぶえのすあいれす丸」や「りおでじやねる丸」、「もんでびでお丸」、「さんとす丸」、「らぶらた丸」など移民船の寄港地であり、日本移民のほとんどはこの土地から各地へ旅立っていった。また、日本の商船会社や銀行、貿易商、漁業、果樹、野菜園経営など日系関連企業も多く、日本移民の生活と労働の基盤があった「神田・一九三四」。ところが、この港の目と鼻の先で、米・伯の汽船がUボートの攻撃を受け撃沈。それをきっかけに、一九四三（昭和一八）年七月八日にブラジル当局からサントス市及び海岸地帯の日本人・ドイツ人に対して二四時間以内の強制立ち退きが命じられる。財産の処分も許されず、着の身着のままで行き場を失った人びとが送り込まれた場所のひとつが、戦争で労働力不足にあった耕地^{ファゼンダ}、マリリアであった。クリスマスチャンとしての顔を持つ岸本は、何の予告もなく強制立ち退きを受けた日本人を旧約聖書におけるユダヤ人の運命と重ね合わせて次のように書き残した。

嗚呼、これぞ敵国の中にいる同胞の血と涙の進路であったのだ。

おお！ 海岸地帯から立ち退きを命ぜられた四千の同胞、肅々として堵列を成して追われゆく民族の足跡！

この足跡こそ民族の新しき歴史の一頁へ出発して行く栄えの刻印であることを忘れてはならない。

大南米に於ける我等の「出エジプト記」はかくして血と汗によって書かれたつづある

のだ。「岸本二〇〇二：四四」



写真 3 元サンパウロ新聞編集長、内山勝男が遺した写真。ブラジル国旗や日の丸を手にし、「トビウオ」歓迎を意味する「BOAS VINDAS AOS “PEIXES-VOADORES”」や「マリリア日本人同志一同」を横断幕に掲げた人々の姿が確認できる＝サンパウロ人文科学研究所所蔵

そのマリリアに世界の「トビウオ」が来るのである。しかも、勝ち組最大の組織があった「臣道連盟」が「興道社」として生まれたのもこの地であった。日系コロニアの興奮は最高潮に達したことだろう。二千数百名を収容できるヤーラ・クラブのスタンドには、立錐の余地がないほど日本移民が集まった。この観衆は、パウリスタ線やノロエステ線、ソロカバナ線、州外地・パラナから来た人たちであった。彼らはこの試合を観るために、トラックに乗り合わせて数百キロの道のりを越えてきたのであった〔平田 一九

八一・七三〇〕。

その大舞台で、「トビウオ」は八〇〇メートルリレーに臨んだ。四月一日午後九時という遅い時間にも関わらず、収容定員を大幅に超過する六〇〇〇人もの観客が固唾を呑んで、競技を見守ったという。果たせるかな、日本チームは八分四〇秒六で優勝し、次いで日系二世の若きホープ・岡本哲夫を有する強豪聖州チームが九分八秒六のブラジル新記録でゴールした。日本代表がマークした記録は、昨年ロサンゼルスでの全米水大会上で、同チームが樹立した八分四六秒を五秒以上も短縮するものであった。

全米水大会上を観戦した米国人ジャーナリストをして、「フジヤマのトビウオ」と言

わしめた記録は、運命の地マリリアで塗り替えられた。この結果に気を良くした古橋は、翌日の四〇〇メートル自由形でも四分三二秒六の世界新記録をたたき出した。一カ月前に、オーストラリアのジョン・マーシャルが古橋の持つ記録を破ったばかりであったが、古橋は彼のトレードマークとも言うべき逞しい力泳で世界一を手中に取り戻したのであった(写真4)。

この活躍について、前述の岸本は「岸本丘陽」というペンネームで、勝ち組派のメデアである『曠野の星』^{こっや}第一号に「トビウオ」と一人の少年の出会いを題材にした短編小説を発表した。「古橋の世界記録秘話―猛雨の中に打振る母の旗」と題した物語には、ある貧しい少年が雨降りそぼつマリリアで、母の形見の日の丸を手日本代表を応援する姿が描かれる。岸本は、古橋の世界新記録を「貴方の其の偉業がブラジルの二十萬の二世を奮起させる原動力を作って下さることになるのです。二十萬の二世諸君が、此の地球の果てに、日輪の上るが如き、素晴らしい人間になってくれた時、其所に日本の興隆の姿と、ブラジルの発展があるのです」という少年の言葉に奮起した結果として情緒的に描く「岸本 一九五〇：三」。

その一方で、『日伯毎日新聞』もまた、喜びを露わに日本代表の活躍を「全コロニアは涙もて君らを仰ぐ……あゝ光栄のマリリア!!! われらの先駆者たちが熱と汗と涙もて創造したこの街。今こそ、「世界のマリリア」としてこの誇りを高らかに世界に向かつて告げよ!」と万丈の気を吐いた¹⁷。代表の偉業は明らかに、不毛の地を切り開き、実りの大地に変えた先人の努力に重ね合わせられている。同化政策において散々槍玉に挙げられたコロニアが、自己の存在を肯定的に捉え直そうとしたところに、「トビウオ」がもたらした影響の一片を見てとれよう。

ここまで来た時、我々は日系コロニアが日本代表に何を見出そうとしていたのかを理解することができる。『日伯毎日新聞』は、ブラジルでの全行程を終えた「トビウオ」を「戦後久しく沈んでいた暗いコロニアに、果然「活」を呼び起し、民族的な感げきと昂奮の中に「心の太陽」をあたえた」と讃えた¹⁸。その一方で、『伯刺西爾時報』は、「彼等選手は語らずといへども「同胞よ、日本人たれ、日本人としての誇りと襟度を堅持せよ、而しこうして安んじて待て」と叫ぶ選手達の声なき声を吾等が胸奥に響くを覚えるのである」と評した¹⁹。

前述のとおり、ナシヨナリズムの高揚に敏感だったのは、他ならない古橋本人であった。古橋は晩年、「私が水泳一途に戦後を泳ぎ続けて来たのは、自己との戦いであって日本の戦後を背負って泳ぎ続けて来たわけでは決してない。たまたま結果として、私の相次ぐ世界記録の更新が日本人の一人一人に夢と希望を与えたにすぎなかった」と書き残している「古橋 二〇〇四：一一四」。



写真 4 日本代表が2つの世界記録を更新したマリリアの大会。前列2列目左から、村山、古橋、橋爪、浜口。橋爪が肩を触れているのが、岡本=ブラジル日本移民史料館所蔵

にもかかわらず、邦字紙の総括からも垣間見えるように、日本代表はコロニアにとって日本人としてかくあるべき理想を体現していた。一命を賭して猛練習に励み、外地で闘うその姿は、異境で懸命に生きる人びとのロールモデルであった。日本代表が多くを「語らず」とも、逞しさや底力、努力、堂々とした態度を以て形容される「トビウオ」の資質は、コロニアによって日本人の「美德」に読み替えられていったのである²⁰。

おわりに

今日、東京からサンパウロまではわずか三〇時間のフライトに過ぎない。ブラジルではNHKワールドプレミアムが放送され、地球の裏側にいても忽ち、日本の出来事を正確に知り、四季折々の風景を身近に感じることができる。

だが、この二つの国の間にはかつて、最新の大型客船を以てしても四〇日から六〇日もかかる地理的空間が広がり、容易に埋めることができない心理的な隔たりがあった。祖国を後にした一世や、異国の地で生まれ育った二世たちにとって、日本人として生きることがどれほどの困難と葛藤があったのだろうか。日伯間で国交すら回復していなかった時代に、世界の「トビウオ」がやって来たことは、日本移民が物理的・精神的な距離

を東の間忘れるのに十分な出来事であった。

日系コロニアはマイノリティに対する寛容性を欠いた民族主義と「勝ち負け抗争」によるコミュニティ崩壊の危機を乗り越えねばならなかった。日本という共通のルーツを持ちながら、アメリカへ入植した人びとに比べれば、いかにブラジルの日本人が不安定な戦後を生きてきたかを理解できるだろう。たしかに、アメリカにおける日系人もまた、大戦間期に敵国のスパイとの誹りを受け、市民権を不当にも停止されたが、VVV（大衆勝利奉仕団）や第四四二連隊の犠牲などによって、モデル・マイノリティ（模範的少数民族）への階段を駆け上がった。その一方で、ブラジル日本移民の多くは、確固たる社会的地位を直ちに得たとは言い難く、戦後も日系コミュニティへの帰属を要した。

そうした中で、日本代表は「勝ち負け抗争」の対立を乗り越えて、コロニアが宥和を図るきっかけを担っていた。実際に、皇室を尊び崇めた日系コロニアにとつて、昭和天皇の薫陶を受けた「トビウオ」は、その期待に十分に応えうる存在であった。一方で、パロス州統領やパジャリア体育局長が日本代表の活躍を公式に讃えたことは、選手と同じように海外で奮闘する日本移民の評価を高めるものであった。

代表一行が四〇日余りをかけて各地を訪問する中で、多くの移民達が応援に熱を上げたことは前述のとおりである。彼らが「トビウオ」に自己同一化したのは、スポーツの世界ならば堂々と日本に対する「愛国心」を発露できるとの認識が生まれたからに他ならない。ブラジルで生きるならば言葉や文化を捨てよ、と一方的に迫られ続けた移民が日本代表から読み取ろうとしたものは、逞しさや底力、努力、堂々とした態度であった。これらはスポーツというフィクショナルな世界を離れ、現実世界でも見習うべき日本人の理想と理解された。

やがて、日系コロニアが水泳に託した夢は、二年後のヘルシンキで大輪の花を咲かせる。一九五二（昭和二七）年、フィンランドで行われたオリンピックで、日本人・日系人選手が表彰台を独占したのである。一五〇〇メートル自由形で、各国強豪を抑えてメダルを獲得したのは、アメリカのフォード紺野（優勝）、橋爪四郎（二位）、そして岡本哲夫（三位）であった。

この大会で意識を失うほどのデッドヒートを演じた岡本は晩年、一世だった父親の「お前はサムライの子孫だ。大和魂をみせてから死ね」との言葉に奮起させられたと述べている²¹。激しい同化圧力の下、それでも日系コロニアが守ろうとした「日本人」としての矜持は、世界の「トビウオ」に励まされ、ブラジルで生まれたもう一人の「日本代表」に引き継がれていったのである。

凡例

読みやすさを考慮して、適宜句読点を加えたほか、引用文の旧字体を一部、新字体に書き改めた。また、引用資料において、明らかな誤字・誤植等はこれを訂正した。

引用文献

- 伯刺西爾時報社編 一九三三『伯刺西爾年鑑 一九三三』伯刺西爾時報社、二三七
- ブラジル日本移民百周年記念協会／日本語版ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会編 二〇一三『ブラジル日本移民百年史 第四卷 生活と文化編(二)』トッパン・プレス、一九五
- ブラジル日本移民史料館・ブラジル日本移民百周年記念協会・百年史編纂委員会編 二〇〇八『ブラジル日本移民百年史 別巻 目でみるブラジル日本移民の百年』風響社、一二、一七、一三二、一八四―五
- 第二三次ぶらじる丸 一九六一「快晴に恵まれた船内運動会」『青海原 昭和三六年一月二二日』JICA横浜海外移住資料館所蔵
- 遠藤十亜希 二〇一六『南米「棄民」政策の実像』岩波書店
- 深沢正雪 二〇一〇「勝ち負け抗争から創刊へ(一九四六―一九五一年)―ブラジル日本移民百周年記念協会／日本語版ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会編『ブラジル日本移民百年史 第三卷 生活と文化編(二)』風響社、一七―四三
- (ニッケイ新聞社編) 二〇一七『勝ち組』異聞―ブラジル日系移民の戦後七〇年』無明舎
- 古橋廣之進 一九八六『地球ひと周り半』ベースボール・マガジン社、一一二―一三
- 二〇〇四『古橋廣之進―力泳三十年』日本図書センター、一一二―一六
- 半田知雄 一九五〇『半田知雄 日記 ピラジューサーラの新住居 四八年十二月―五年二月』サンパウロ人文科学研究所蔵(未刊行)
- 一九八一『移民の生活の歴史―ブラジル日系人の歩んだ道』サンパウロ人文科学研究所、七二四―六、七三〇
- 石井賢治 二〇一三「陸上競技」ブラジル日本移民百周年記念協会他編『ブラジル日本移民百年史 第四卷 生活と文化編(二)』トッパン・プレス、一九八―二〇六
- 石川達三 二〇一四『蒼氓』秋田魁新報社
- 伊藤秋仁・住田育法・富野幹雄 二〇一五『ブラジル国家の形成―その歴史・民族・政治』晃洋書房、一四三―四
- JICA横浜海外移住資料館 二〇一六『企画展示 二つのオリンピックピククスポーツが つないだ日系社会』非売品(図録)、二
- 神田外茂夫編 一九三四『大阪商船株式會社五十年史』大阪商船株式會社
- 紀元節奉祝会編 一九六八『紀元節奉祝会小史』紀元節奉祝会
- 岸本昂一 二〇〇二『南米の戦野に孤立して』東風社、三八―四四
- (岸本丘陽) 一九五〇『曠野の星 第一号』出版社不明、三
- 小林ルイス 二〇一六「戦前期ブラジルにおける武道と教育」根川幸雄／井上章一編著『越境と連動の日系移民教育史―複数文化体験の視座』ミネルヴァ書房、二五七―

- 国立健康・栄養研究所 一九五一「国民栄養調査の概要」『国民栄養の現状（昭和二五年度国民栄養調査成績）』厚生省、二二一
- 森幸一 二〇一三「水泳」ブラジル日本移民百年記念協会他編『ブラジル日本移民百年史 第四巻 生活と文化編（二）』トッパン・プレス、二二五―二六
- 根川幸男 二〇一六「越境するスポーツと移民子弟教育―太平洋戦争直前期ブラジルにおける日系少年野球を事例に」根川幸雄／井上章一編著『越境と連動の日系移民教育史―複数文化体験の視座』ミネルヴァ書房、二七―九四
- Ruoff, Kenneth J., 2001, *The People's Emperor : Democracy and the Japanese Monarchy, 1945-1995*, Cambridge : Harvard University Asia Center. (=ケネス・ルオフ 二〇〇三『国民の天皇―戦後日本の民主主義と天皇制』共同通信社)
- サンパウロ人文科学研究所編 一九九六『ブラジル日本移民・日系社会史年表―半田知雄編著改訂増補版』サンパウロ人文科学研究所、一二九―三〇
- 住田育法 二〇一六「戦間期ブラジルの独裁政権とナショナリズムの高揚」根川幸雄／井上章一編著『越境と連動の日系移民教育史―複数文化体験の視座』ミネルヴァ書房、三一九―四〇
- 外山脩 二〇一二『ブラジル日系社会百年の水流（改訂版）―日本外に日本人とその子孫の歴史を創った先人たちの軌跡』トッパン・プレス

（のりまつ すぐる ポートランド州立大学 歴史学部 客員研究員）

註

- ¹ 『日伯毎日新聞』一九五〇年四月一九日
- ² 本稿では、邦字紙を主な題材として、どのように日本代表が報じられたのかを分析する。日本語メディアの発禁処分が解けた一九四六（昭和二一）年末から一九五五（昭和三〇）年にかけて、「勝ち負け思想戦」を背景に雑誌一〇誌以上、機関誌三〇誌以上が創刊された。雨後の筍の如く乱立した刊行物の中でも、『伯刺西爾時報』と『日伯毎日新聞』は、エスニック・メディアの二大紙と言えよう。前者は、もともとブラジル拓殖会社の機関誌として創刊したが、「デカセギ志向」を持つ農村の読者が多く、紙面は国粹主義的な傾向を有していた。それに対して、後者は永住志向の強い都市生活者を読者に持ち、日本の官憲から一定の距離を置いた紙面作りに努めた「深沢二〇一〇…一七―四三」。
- ³ 興味深いことに、ヴァルガス大統領その人も、移民のブラジル化を推し進めるために、リオデジャネイロが生んだ音楽「サンバ」と国際的スポーツ「サッカー」を利用した。ヴァルガス政権は一九三三（昭和八）年に、労働組合への加盟を義務づけたプロ・サッカー選手を誕生させた。白人エリートのスポートであったサッカーが、貧しい家庭出身の黒人や庶民層にまで拡がったのは、民族主義の下に新たな国民文化を創

- 造しようとしたことによる「住田 二〇一六・三一九―四〇」。
- 4 『伯刺西爾時報』一九五〇年二月一日
 - 5 菊地義治「追悼寄稿特集Ⅱ日系初の連邦下議Ⅱ田村幸重氏逝去に寄せて」『ニッケイ新聞』二〇一一年七月二三日
 - 6 『日伯毎日新聞』一九五〇年四月一九日
 - 7 『朝日新聞』一九四九年七月二三日
 - 『読売新聞』一九四九年七月二三日、一九七五年九月三日
 - 8 『朝日新聞』一九四九年九月六日
 - 9 “Sylvio Padiha, “SR/OLYMPIC SPORTS (<http://www.sports-reference.com/olympics/athletes/pa/sylvio-padiha-1.html> 二〇一七年五月一日)。
 - 10 深沢正雪「ブラジル水泳界の英雄 岡本哲夫Ⅱ日伯交流から生まれた奇跡Ⅱ(6) ヴアルガスに抵抗した反骨の人」『ニッケイ新聞』二〇一六年八月一六日
 - 深沢正雪「ブラジル水泳界の英雄 岡本哲夫Ⅱ日伯交流から生まれた奇跡Ⅱ(8) Ⅱ反ヴアルガスのな飛魚招へい」『ニッケイ新聞』二〇一六年八月一九日
 - “Lado B das Olimpíadas : Atleta e dirigente, Major peitou Getúlio, Maluf e ditadura,” ESPN(http://espn.uol.com.br/noticia/494905_lado-b-das-olimpiadas-atleta-e-dirigente-major-peitou-getulio-maluf-e-ditadura 二〇一七年五月一日)。
 - 11 『毎日新聞』一九九九年一月二九日
 - 12 『伯刺西爾時報』一九五〇年三月八日
 - 13 『日伯毎日新聞』一九五〇年三月一日
 - 14 『日伯毎日新聞』一九五〇年三月九日
 - 15 『日伯毎日新聞』一九五〇年三月二一日
 - 16 田中慎二「コロニアの良心 半田知雄」
(<http://www.cenb.org.br/articles/display/113> 二〇一七年五月一日)
 - 17 『日伯毎日新聞』一九五〇年四月二日
 - 18 『日伯毎日新聞』一九五〇年四月二〇日
 - 19 『伯刺西爾時報』一九五〇年四月一四日
 - 20 『日伯毎日新聞』一九五〇年三月二七日
 - 『伯刺西爾時報』一九五〇年四月一四日
 - 21 『ニッケイ新聞』二〇〇四年八月一四日